



大倉山記念館と梅林

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

毎年、二月末から三月初旬あたりに、自宅近くの大倉山（横浜市港北区）の梅林に行く。昨年はあまりにも寒い日が続いたので腰が重くなり、ようやく足を運んだ時には花はしおれていた。今年、は暖かな休日を迎えることができたので、同行者の妹、つまり私の義妹も連れて出かけることにした。

義妹は二年前に結婚して帯広から出てきたが、驚くことに梅を見たことがないという。正確には北海道は梅と桜が同時に咲くうえに、桜の種類もいろいろあるので区別がつかなかったらしい。それはないだろう、とは思ったが、まあ、そういうこともあるか、きつとそうだと自分に言い聞かせながら、東急東横線の大倉山駅から梅林へとつづく、急な坂道を三人で歩きはじめた。

大倉山の名の由来は、実業家で東洋大学の学長も務めた大倉邦彦が、ここに大倉精神文化研究所を設立したことによる。ちなみに大成建設の創設者である大倉喜八郎の大倉財閥とは関係がない。

大倉精神文化研究所は、「東西両洋の精神文化を研究し、もって世界文化の進展に貢献する」ことを目的に設立され、その建築は長野宇平治（一八六七～一九三七）が設計し、昭和七（一九三二）年に完成した。長野は明治中期から昭和初期にかけて、日

本銀行などの銀行建築を中心に腕をふるった建築家であり、大正六（一九一七）年には日本建築士会（現・日本建築家協会）の初代会長に就任するなど、日本近代建築史にその名を残す。大倉精神文化研究所を設計するにあたっては、世界に類をみない古代ギリシャ以前の「ブレヘレニック様式」を採用し、それに東洋意匠も加味して、「東西文化の融合」という大倉の理想を具現化したのだという。この建築は、敷地と共に昭和五十六年に横浜市の所有となり、大倉山記念館として地域の文化活動やイベントに利用されている。

義妹の梅と桜ではないが、私を含めて大抵の人にとってはブレヘレニックもヘレニックも大差はないだろう。しかし、ここを訪れた人は、木立の奥に清然として建つギリシャ風建築の威容に目を奪われるはずだ。雑然とした駅周辺とはあまりに異なる空間がそこにある。

もう一つ、この建築に関して特筆すべきことは、建築時の図面・見積書・注文書・請書・会計帳簿・書簡など四、〇〇〇点以上が、「大倉精神文化研究所建設関係資料」として現存していることだ。こういった例は極めてめずらしく、昭和初期の請負業態を調べる上でも建設産業史の貴重な資料となる。

その大倉山記念館の脇を抜けると、梅林はすぐそこだ。ここは東急電鉄が昭和六年に開園した小規模の梅林だが、大倉山の谷間にあるため満開の梅を上から見渡すことができる。今年は大雪の影響か、まだ七分咲きといったところだが、青空の下でビール片手の観梅はやはり格別だ。今日はこの後、家にもどって三人で鍋をつつきながら酒を飲む。ゆたかな休日はまだ始まったばかりだ。



大倉山記念館

[交通] 東急東横線 大倉山駅から徒歩約10分